

# 『央掘魔羅經』における「如来藏」管見

小川 一 乗

この度、『新国訳大藏經』（インド撰述部 一〇八冊）が出版されることになり、その中の「如来藏・唯識」（四冊）の一冊を担当することになった。担当する経典は『央掘魔羅經』（四巻）、『勝鬘獅子吼一乘大方便方広経（勝鬘經）』（一巻）、『大方等如来藏經』（一巻）、それに『仏説不増不減經』（一巻）である。

この中、すでに『勝鬘經』は蓮沢成淳によって国訳（書き下し文）され、『国訳一切経』の「宝積部 七」に、また『如来藏經』と『不増不減經』は常盤大定によって国訳され、『国訳一切経』の「経集部 六」に、それぞれ収録されている。それらの国訳について、今回改めて異を称えたり、況んや全面的に改訂を加えなければならない程の問題があるわけでもない。従って、それらの国訳を基本とするが、今回それに新たに新たに加えるとするれば、チベット訳本の現存する『勝鬘經』と『如来藏經』については、それを参照しつつ、さらには、これらの経典が引用されている如来藏思想の論書『究竟一乘宝性論』（以下『宝性論』と略称。）のサンスクリット原文（*Ratnagotravibhaga Mahāyānottaratantrasāstra*, edited by E.H. Johnson, Parna）を提示し、また、『勝鬘經』は、『大乘集菩薩学論』にも引用されているので、そのサンスクリット原文（*Śikṣa-samuccaya*, edited by P.L. Vaidya, BST, No. 11）と、さらには最近になって Schøyen Collection（アフガニスタン出土仏教写本）<sup>①</sup>の中にも最後の部分のサンスクリット断簡のあることが明らかになったので、そのサンスクリット原文とを提示しつつ、国訳を試みた。そのため、語句の区

切りなどで、先学の国訳とは多少異なる部分もある。また、漢訳のみとして現存する『不増不減経』については、それが引用されている『宝性論』によって、そのサンスクリット原典の一端を示すに止めた。

これら三經典に比べて、『央掘魔羅経』は、これまで国訳されたことがなく、今回が最初の国訳であるが、すでに本経については、幾人かの先学によって注意され、その如来藏思想について概観されている<sup>②</sup>。今回の国訳に際して、それらの研究によって、本経についての予備知識を持つことができた。さらに幸いにも、チベット訳本が現存し、しかも、内容的にそれほど大きな相異はなく、漢訳とチベット訳との両者のサンスクリット原典は、ほぼ同類のものと考えられる。そのため、漢訳だけでは意味を了解するには困難な部分もあったので、チベット訳本は国訳に当たって大変参考になった。それでも文意不明の部分が残されている。

先ず、本経のテキストであるが、次の通りである。

漢訳本 『大正新脩大藏経』(第二卷、No.120)。

『央掘魔羅経』 四卷、劉宋 求那跋陀羅 訳。

チベット訳本 北京版『西藏大藏経』(vol.34, No.879)。

Hphags-pa sor-mohi phren-ba-la phan-pa shes-bya-ba theg-pa chen-pohi mdo. (Ārya-angulimalīya-nama-mahāyāna-sūtra・聖者アングリマールと名付ける大乘經典)

翻訳者 Sakya-prabha, Dharmasīla, Ton a cala, etc.

ちなみに、本経は、漢訳では經典名のためか、「阿含部」に収められているが、チベット訳は「諸経部」に収められている。

『央掘魔羅經』(四卷)は、その經典名に表示されているように、アビダルマ仏教において伝説されているアングリマーラ物語を題材として如来藏思想を説いている經典である。アングリマーラ物語とは、舍衛城のバラモン出身のアングリマーラ (Angulimala、音写語の一つが「央掘魔羅」、意識語は「指鬘」) が妻に懸想したと誤解した、師の命により次々と人を殺し、自らの母をも殺害しようとしたが、釈尊の教化によって出家して、比丘となったという物語(『テラガーター』八六六～八九一偈)である。アビダルマ仏教におけるこの物語が、実話か否か、どのような形成過程を持っているか等の問題については、ここでこれ以上言及することは差し控える。

以下に、「如来藏」という語に関わる用例に注意しながら、本經の内容を略説するが、その中に挿入されるサンスクリット語は、本經のチベット訳本によったものである。まず本經の導入物語は、バラモンを師とする「一切世間現 (Hig rten thams cad kvis bla na sdug pa)」という弟子が、アビダルマ仏教に伝承されているアングリマーラ物語の筋書き通りに、かなりの着色が加えられているけれども、多くの人々を殺害し、その指を花鬘のようにして首飾りとした為に、恐れられてアングリマーラ (指鬘) と呼ばれることになることから始まる。そしてその殺人鬼アングリマーラが、釈尊の教化によって調伏され、懺悔し帰仏を誓うに至る。その希有な出来事に驚嘆し、諸天や仏弟子たちが次々と登場して、アングリマーラを賛嘆し説法するが、それぞれの登場者に対して、釈尊によって説かれた教法の真意(密意趣)を了解していないものであるとして、逆にアングリマーラから説法されるという筋書きである。最初に帝釈天が現れて、アングリマーラを賛嘆するが、却ってアングリマーラから説法されるところまでが第一巻である。このまでの所にはまだ「如来藏」(tathagata-garha) という語は見当たらない。

第二巻では、引き続き次々と、諸天と仏弟子たちが登場して、アングリマーラを賛嘆するが、却って釈尊の教えの真意(密意趣)を了解していないと説法されるという場面が続く。登場者は、梵天王、四天王、摩醯首羅、樹神、

舍利弗、大目犍連、阿難、羅喉羅、阿那律と続いて、次の沙門陀娑 (Dāsaka) との対論に於いて「如来蔵」(tathagata-garbha) の語が初出する<sup>③</sup>。しかし、それは単に「如来蔵を説く」という表現に終わっているが、続いての満願子 (purna・富楼那) との対論では、声聞乗の立場からアートマンを否定する無我が説かれるのに対して、アングリマールは、釈尊によつて一切衆生に如来蔵はないとも、一切衆生に我界 (ama-dhatu) はないとも説かれていないと応答し、ここに「如来蔵すなわち我界」と説かれる。釈尊は外教が説く世間的な存在としてのアートマンは得られないと説かれたから、それと同じような存在としての如来蔵を求めても、「一切衆生において如来蔵なく、求めて得られない」とし、「如来蔵の作は得べからず。如来性 (buddha-dhatu) はこれ無作なり」と。従つて「如来蔵を聞くも信樂を生ぜず」<sup>⑤</sup>などと説かれ、しかも如来蔵は常住であつて一切衆生にあると説き始める。その対論の部分はすでに一応の和訳がなされているので、その内容について詳しく言及することは省略し、その終わりの部分の一文を国訳で示すに止める。

油は水と雜ること不可得なる如く、是の如く、無量の煩惱が如来性を覆うも、仏性は煩惱と雜ること、是の處あること無し。而も、是の仏性は煩惱の中に住せり。瓶の中の燈の如く、瓶を破すれば則ち現れり。瓶とは謂く煩惱なり。燈とは謂く如来蔵なり。如来蔵を説く者は、或いは是れ如来、或いは是れ菩薩、或いは是れ声聞なり。<sup>⑦</sup>  
ここに煩惱に覆われているが故に、一切衆生は如来蔵の有ることを知らないという、如来蔵と煩惱との關係が説かれる。続いての孫陀羅難陀、優波離、文殊師利、舍利弗との対論の中では「如来蔵」は説かれていない。

最後の対論者である大目犍連との対論の中で如来蔵思想と深い關係にある一闍提 (icchantika) が「邪定の者」<sup>⑧</sup>にして「十悪行を具足する者」と説かれるが、そこでは「如来蔵」との直接的な關係は明示されていない。ただし、一切衆生の救済を説く大乘仏教においてこそ「一切衆生は悉く如来蔵を有する」と説かれ、アングリマールのような殺人鬼であっても、帰仏して釈尊の弟子となるという本經の主題からすれば、大乘『涅槃經』において、正法を誹謗

する者とか、善根を断じている者と言われる一闍提であつても、仏性を有し、やがては回心して不成仏から成仏へと転じていくと説かれている、その一闍提がここに登場するのは極めて自然な流れである。何となれば、アングリマラこそが一闍提と言われるべき具体的な存在であるからである。

その終わりに、釈尊はアングリマラに対して「出家して三帰依を受けよ」と勧め、次々と童真淨戒、不殺生戒、不妄語戒、不飲酒戒、不姪淨戒、離不與取戒、不歌舞戒を受け、第二巻は終わるが、ここに説かれる戒とは常識的な内容のものではなく、例えば、その最後の不歌舞戒とは、如来藏を讃えて歌誦することであると、次のように説かれている。

如来藏を宣示して、嗟歎して「善き哉」と称えん。

彼の諸仏の所に於いて、如来の常住なるを聞きて、  
恒に妙音を以て、大乘の修多羅を誦さん<sup>⑨</sup>。

第三巻では、まず、

一切の衆生の命は、皆、飲食に由りて住せり

是れ則ち声聞乘にして、斯れ摩訶衍に非ざるなり

所謂、摩訶衍は、食を離れても、常に堅固なり

と、大乘『涅槃経』と同等の趣旨で、声聞乘と大乘とを対比して専ら「如来常住」が説かれ、続いて、十方の諸々の仏国土の諸仏たちこそが、実は釈尊となつているにほかならないと「八十億の仏は皆な是れ一仏にして、即ち是れ我が身なり<sup>⑩</sup>」と、諸仏とその国土が綿々と説かれているが、その後の箇所「如来藏」に関わる表現が少しく見いだされるので、それを挙げれば、次のようなものがある。

如来蔵を清浄にする法を演説する。<sup>⑪</sup>

恆性 (nitya-dhatu) なる如来之蔵を隠さずに、一切衆生の安慰の為に説くが故に、この恆身を生ぜり。<sup>⑫</sup>  
如来蔵を虚空の鳥跡の如くに説いて、仏性 (buddha-dhatu) を顕現せしむるが故に、不可見身を生ず。<sup>⑬</sup>

無量なる衆生の諸の天、及び人の無我見に執するを転じ、以て難見なる如来蔵を示すが故に、一切衆生に難見之身を生ず。<sup>⑭</sup>

如来蔵を聞きて、一切衆生が諸煩惱を断じて便ち仏と成るを得る。<sup>⑮</sup>

一切衆生の第一の界 (dhatu) なる無垢なる如来蔵。<sup>⑯</sup>

第四卷では、「正法住世 余八十年」という時に当たり、如来蔵を説くということが如何に難事であるかを説き、それを果たすことができるのは菩薩のみであることを説く。この一連の文脈の中で、「如来常恒不変如来之蔵」の一文が続出するが、チベット訳では単に「如来蔵」とあるだけで、「如来常恒不変」の語を欠いている。これは「法身常住」を説く大乘『涅槃経』がすでに法顕や曇無讖によつて漢訳されていて、その影響の下で漢訳者（求那跋陀羅）が挿入したものであるうか。

続いての文殊に対する釈尊の説法の中で、文殊が、声聞乗の立場から、央掘魔羅に対して、

如来蔵とは何の義あるや。若し一切衆生が悉く如来蔵を有すならば、一切衆生は皆、まさに仏と作るべきに、一切衆生は皆、まさに殺と盗と姪と妄語と飲食等の不善業の跡あるべし。何を以ての故なり。一切衆生が悉く仏性を有するならば、まさに一時に度を得べし。若し仏性を有するならば、まさに逆罪、及び一闍提を作すべきや。若し我 (atman) あらば、我界 (atma-dhatu) こそ、まさに一切の有を度すべし。是の故に、世間に我あることなく、界あることなし。一切法は無我なりと、是れ諸仏の教なり。<sup>⑰</sup>

という問いを発すると、釈尊が「一切衆生は如来蔵を有すも、無量の煩惱の為に覆われり。瓶の中の燈の如し」と、それに応答し、如来蔵が有つても、必ずしも仏となり解脱するわけではなく、時には一闍提となり逆罪をも犯すことを、譬喩をもって説き明かしている。この部分は、大乘『涅槃經』において、肉身の釈尊の入滅（無常）と法身の常住の問題、すなわち、無常・苦・無我・不浄という声聞乘の立場からの問いと、それに対する常・楽・我・浄という大乘の立場からの応答が説かれている、それに対応するものといえよう。この部分も本經の重要な箇所と見なされ、すでに一応の和訳がなされている。従って、その内容に立ち入らないが、その中には、「如来蔵」の思想的根柢の一つである「自性清浄心 客塵煩惱」などが説かれている。

最後に至り、本經が誹謗され、多くの人々が一闍提となつているとし、特にカシミールの国名を挙げ、大乘仏教を信奉しているのは半数に過ぎなく、南方の菩薩たちは如来蔵を説いていると説かれているが、この記述から本經が説かれた頃の時代背景を伺うことができ、注意が引かれる。

本經におけるアングリマラ物語の結末は、舍衛国の波斯匿王にアングリマラが帰仏したことを示し、彼の殺戮などはすべて幻化であると教えて結ばれている。

本經における如来蔵思想の特色は、端的に言えば、如来は常住堅固であるという主張と、如来蔵は有るという主張とによって占められているが、「如来常住」とはどういうことであり、「有如来蔵」とはどういうことであるかという、その思想内容にまで踏み込んで説くに至っていない。この点から言えば、大乘の『涅槃經』に説かれる「法身常住」と「悉有仏性」と軌を一にしている。しかし、大乘の『涅槃經』の場合は、アビダルマ仏教における『涅槃經』が、釈尊の入滅に到るまでの最後の旅として編纂されているのに対して、肉身の釈尊が入滅してしまえば、帰依三宝の中の最も大事な仏宝が存在しなくなるといふ深刻な問題を解決するために、肉身としての釈尊を釈尊たらしめたその法

身は常住であるという「法身常住」という主題が強調され、それを基礎づける役割をはたしているのが「悉有仏性」であるという、相互の明確な関係がある。それに対して、本経における「如来常住」と「有如来蔵」との関係はどのように考えられるのであろうか。殺人鬼アングリマーラ物語を題材として、一闍提に等しいアングリマーラが釈尊の教化により回心して比丘となるという事柄を、大乘仏教における一切衆生が救済されなければならないという課題のための最適な材料としたということは言い得るであらう。そこには、因縁によって殺人鬼ともなり、因縁によって比丘ともなる、殺人鬼も仮であり、比丘も仮である、という大乘仏教の「空」の思想に基づく論理が常に密意されているのである。その密意を明らかにするために、「如来常住・有如来蔵」と説かれたのである。くしくも、大乘『涅槃經』においても、有名な王舎城で起こった史実として伝えられている悲劇物語、父王ピンピサーラ（頻婆娑羅）を殺害するという五逆罪の一つを犯したアジャータシャトル（阿闍世）の懊悩とその救済が、アビダルマ仏教の『沙門果經』を下地として説かれているが、その物語と同様の意趣で、本経における殺人鬼アングリマーラの帰仏を了解することができる。

さらに本経に説かれる「如来蔵」の大きな特徴として、殺人鬼アングリマーラの所業は因縁所生であると説くことから必然的に引き出される、業報による輪廻転生という前世の業という業の在り方（宿業）を否定していることである。そして輪廻転生という業の在り方を否定するのが「如来蔵」であり、本経は輪廻の業に束縛され苦悩する人々を救済しようとする如来の誓願によって説かれたのであるとされていることである。<sup>19</sup>

ところで、本経と如来蔵思想を説く他の經典との関係であるが、特に、本経と大乘『涅槃經』との関係が問題になるであらう。この点について、本経に見いだされる「如来蔵」(tathagata-garbha)に関わる用語を管見すると、如来蔵思想について体系的な解釈を論述している『宝性論』において提示されている、「如来蔵」思想に関わる-garbha

と・dhatu と・gotra との三用例の視点から見ると、本経では、この garbha の用語の他に「仏性」(buddha-dhatu) に代表される・dhatu の用例が可成り多く、特に第三巻において集中的に見いだされる。ちなみに、この・dhatu のチベット訳については、本経では、*·dbyins* と *·khams* とが混在している。また、もう一つの用語である「仏種姓」(buddha-gotra) とする gotra の用例は、「如来蔵」との関係において本経には見いだされない。ともかくも、如来蔵思想において、この・dhatu の思想は、特に大乘『涅槃経』において仏性思想として確立したとされているが、その・dhatu が本経においてかなり思想的に、例えば、「一切衆生の・dhatu は法の・dhatu である」とか、「アトマンの・dhatu」とか「無垢の・dhatu」「一つの・dhatu」等と説かれている。その他、先に触れた肉身の釈尊の入滅という大乘『涅槃経』の主題である「正法住世(正法欲滅) 余八十年」という危機課題にも言及されていること、また仏の・dhatu はアトマンの・dhatu であるが、そのアトマンは外道の説くアトマンではないと言った説き方で説明されていることなど、これらを比較するとき、本経と大乘『涅槃経』との関係は深いと見なすべきである。ちなみに、本経と大乘『涅槃経』との前後関係を考えるについて、先学によって、本経における次の一文が注意されている。

如来は常住なりと、大般涅槃の甘露の法を聴聞するを具足して、<sup>21)</sup>

というこの一文が大乘『涅槃経』を年頭においたものであるかどうかということである。参考までに、このチベット訳は、次のようである。

如来は常住堅固であり、般涅槃するも不死であると聞いて、

(de bshin gségs pa rtag pa gyun drun ther zug ste | yons su mya nan las hdas pa yan hchi ba med par thos pas)<sup>22)</sup>

このチベット訳から知られるその内容は、釈尊は八十歳で般涅槃するが、如来は常住であるから、釈尊は死んだのではないという意味であるが、この文意は大乘『涅槃経』の意趣そのものである。

ともかくも、これらの用例による、本経と大乘『涅槃経』との関係、及び如来蔵思想を説く他の經典との関係などについての検討が残されている。今回は、本経の国訳という与えられた役目を終えた時点で、先学の本経に対する研究を踏まえながら、本経における「如来蔵」について管見したという報告の域を出ないものである。<sup>2)</sup>

## 註

- ① Kazunobu MATSUDA: The Śrīmatadevīsimhanadanirdeśasūtra Fragments in the Schøyen Collection. (1) 1998 at the Humboldt University, Berlin. (以下、引用は「Schøyen Collection」の頁目による。)
- ② 高崎直道著『如来蔵思想の形成』(春秋社)第二章「如来蔵と仏性」第二節『央掘魔羅経』一九一―二三三頁。中村瑞隆「央掘魔羅経について」(『福井博士頌寿記念・東洋思想論集』四三二―四四八頁)。
- ③ 大正五二四頁下二九行目。
- ④ 大正五二五頁中一六一―一七行目。  
T↓「作られたものとしての如来蔵 (rahagata-garha) は、努力して求めても得られない。一切衆生において作られたものではない仏性 (buddha-dhatu) は、一切衆生における究極の相である」(Pek.p.317, 41-2)
- ⑤ 大正五二五頁下一七行目。
- ⑥ 大正五二五頁上九行目―五二六頁下四行目。『高崎著』一九五―二〇三頁。
- ⑦ 大正五二六頁中二二―二六行目。  
T↓「例えば、水と油が混じわることは得られないように、そのように、仏性 (buddha-dhatu) もまた無量の煩惱に覆われていて、しかも煩惱と仏性は混ざっているわけではない。「仏」性は無量の煩惱の中にあるといえども、瓶の中に燈があるように、瓶を壊すとき、燈はあらわれ輝くのである。如来蔵を説く者は等覚者である」(Pek.p.320, 2-6-8)
- ⑧ 大乘『涅槃経』(北本『大般涅槃経』「如来性」品第四)大正三九三頁中)では、一闍提は、仏性を有しているが、正法を誹謗し成仏を求めないから不成仏である。しかし、仏性を有しているから、正法を求めれば成仏できる身となり、一闍提

ではなくなるといふ意味で「不定の者」とも説かれている。

- ⑨ 大正五三二頁中七～九行目。  
⑩ 大正五三三頁下二一～二三行目。  
⑪ 大正五三六頁中一二行目。  
⑫ 大正五三六頁中二四～二五行目。  
⑬ 大正五三六頁下五～六行目。  
⑭ 大正五三六頁下六～八行目。  
⑮ 大正五三七頁中一〇～一一行目。  
⑯ 大正五三七頁中一九行目。  
⑰ 大正五三九頁上一四行目～二〇行目。  
⑱ 大正五三九頁上一四行目～五四〇下二六行目。『高崎著』二〇三～二二三頁。  
⑲ 「世尊。彼本惡業故到此死。仏告文殊師利。勿作是說。彼非時死耳。非本惡業報也。文殊時利。彼仏不知先惡業報而記之耶。無先惡業今作過以致失命耳。……」(大正五三九頁中二～五行目)。T↓de sñon las ñan pa bgyis pas gun mo | bcom ldan hdas kyois bkah sstal pa | hjam dpal de skad mzer cig | de ni dus ma yin pañi char bab pa ste (D.dus ma yin pa tsam bab pa ste) | sñon las ñan pa byas pa ma yin no || bcom ldan hdas de bshin gšegs pa luñ sñon pa na | des sñon las byas pa mi mkhyen par lun bstan re skan | de ni sñon las byas pa (D.sñon las ñan pa byas pas) shi ba ma yin gyi | bdag nid kyois te | bdag gis bsad do || (Pek.p.334.2-7~3-1.) 「それは前業が悪を作したから死んだのですか。世尊は言われた。文殊よ、そのように言っではいけない。時ならぬ雨であり(○)単に時ならずして早く死んだのであり(○)、前業が悪を作したからではない。世尊・如来が授記するとき、彼によって前業が作されたのを知らないで授記をなすはあろうか。彼は前業が「悪を」作したから死んだのではなく、自分自身で過ちを為し、自分が殺したのである」。
- 「一切衆生無本業耶。仏告文殊師利。彼有本業但少聞是經。無量阿僧祇罪皆悉除滅。所以者何。如来無量阿僧祇劫發大誓言。一切衆生未度令度。未脫令脫。以此誓願善根。如来慧日光明所照。無量阿僧祇罪皆悉除滅」(大正五三九頁中二三～一八行目)。
- T↓ | sens can thams cad la sñon bgyis pañi las ma mchis ses bgyi ham | bkah sstal pa mdo sde las yod ces hbyun mod

kyi | thos pa tsam gyis grans med pañi yan grans med pa de byas pañi las nams zad par hgyur ro || de cñi phyr she na |  
 de bshin gśeags pa bskañ pa bye ba grans med pa mañ po nas | ñig rten gyi phyr ñam beas te | bñag grol nas sems can  
 thams cad dgyol lo || bñag rgal nas sems can thams cad bsgral lo shes de ñar ñam beas pañi dge bañi rtsa bas | de bshin  
 gśeags pa ñi mañi ñod kyri gzi brñd kyis las byas pa mañ us par zad par hgyur ro || (Pek.p.334.3-5-7). 「一切衆生には前に  
 作された業があるのではないとすのですか。〔世尊は〕言われた。經典の中には有るとなっているけれども、〔この経部を〕  
 聞くだけで、無量阿僧祇に作った諸々の業は滅尽するであろう。どうしてかと言えば、多くの阿僧祇劫に互って、世間の為に  
 誓願して、『私が度脱して一切衆生を度脱せしめん。私が度脱して一切衆生を度脱せん』とそのように誓願した善根によって、  
 如来は、太陽の光の威力をもって、作られた業を残り無く滅尽するであろう」

⑳ 大正五二六頁上一〇～一一行目。

㉑ Pek.p.319-5-2～3.

㉒ 本経と『如来藏经』との関係についても、本経に「如来藏经」の語が見いだされることから注意されているので、それをこ  
 こに挙げておく。それは「如来藏经。不以生死寿果欺誑」(大正五三九頁下一三～一五行目)の一文であるが、これに対する  
 チベット訳は、次のようである。「この如来藏の経部は、意味なくして作られないのであって、命と寿の果あるべきである」  
 (Pek.p.334-5-4.)